現代ドイツ語俳句選集

―― はじまりから 1990 年まで（その 2）――

Die Anthologie der Deutschen Haiku von Heute : von dem Anfängen bis 1990（Nr. 2）

マルグレート・ブァーシャーパー（編者）
Margret Buerschaper
竹　田　賢　治（抄訳）
übersetzt von Kenji Takeda

は　じ　め　に

前稿のつづきである。今回は季節をあらわすような写真を添付した。カラーであればいいのだが、白黒ではあまり効果はないかも知れない。写真の提供はザビーネ・ゾマーカンプ女史。

前回の「その 1」を知人のドイツ人に見せたところ、次の句を読んで笑いがおこった。

Wildgänse fliegen	雁が飛ぶ
In Reihen gegen Norden―	列をなして　北に向かって―
Schrillen Schrei im März.	三月の鋭い声
(Theophil Krajewski)	(雁帰る声の鋭き春の夜)

笑う理由をたずねると、この句は次の軍歌を連想させるという。

Wildgänse rauschen durch die Nacht	雁が夜中騒いでいる
Mit schrillem Schrei nach Norden ―	鋭い声で北を目指して
Unstäte Fahrt ! Habt acht, habt acht !	危なかしい飛び方だ！　戦友よ気をつけろ
Die Welt ist voller Morden.	世界は殺戮でいっぱいだ

ユー・チューブでも聴けると教えてくれたので試してみると、なるほど、行進を鼓舞する軍歌でポピュラーな曲であった。ブアーシャーパーの解釈にはその言及はなかったので、日本風に風雅な

「鳥帰る」の句だと思っていたが、意外な落とし穴であった。つまり、この一句は上の軍歌を踏まえた作品なのだ。風雅ではなくユーモラスな、いわば、俳諧の要素を備えたとも言える一句であった。

Jahreswechsel

（大晦日と新年）

＊凡例：(1) の後の(1)はブアーシャパー女史の原稿の通し番号。
下線はブアーシャパーによる季語。
（竹田）は訳者。

(1)（1）
Winfried Hönes（ヴィンフリート・ヘーネス）

Schneetropfen funkeln	雪のしずくがキラキラと輝く
In der Neujahrsnacht suche ich	大晦日に私はさがす
Gestern und Morgen	昨日と今日を
	（年の夜や雪のしずくの光りをり）

(2)（5）
Gisela Hümmer（ギーゼラ・ヒュマー）

Neujahrstristesse.	新年の哀愁
Vereinzelt fallen Flocken :	雪片が散る
Teile der Seele.	魂の一部が
	（雪片に憂ひも散るや去年今年）

(3)（6）
Bruno Mach（ブルーノ・マッハ）

Schneeflocken wirbeln	雪片が渦を巻く
wie trunken. Ein Jahr reifte	まるで酔ったように。一年が熟して
zu Eis und Kristall.	氷と結晶となる。
	（風花のキララとなりて年明くる）

Vorfrühling　—　Frühling
（早春、春）

（4）（7）
Ingeborg Brudermann-Kleis（インゲボルク・ブルーダーマン－クライス）

Zu meinen Füßen　　私の足もとで
Spielende Sonnenkringel　　遊んでいる光の輪
ein Hauch von Frühling　　春の息吹
　　（足もとに遊ぶ光や春きざす）

（5）（10）
Heinrich Wiedemann（ハインリヒ　ヴィーデマン）

Unter dem Märzmond　　三月の月の下で
Tropft von den Dächern die Zeit.　　屋根から時のしずくが滴る
Stunde um Stunde.　　刻々と
　　（三月の時のしずくの小止みなく）

（6）（12）
Hans-Joachim Kunold（ハンス－ヨアヒム　クーノルト）

Zwei Krokusblühten　　クロッカスの花がふたつ
Lungen zärtlich aus dem Schnee　　雪の間から顔をのぞかせて
Lächeln unter Last　　頬笑んでいる
　　（クロッカス頬笑む雪のしとねより）

（7）（14）
Elfriede Pärm（エルフリーデ　ペルム）

Regen auf Zweigen　　枝に止まった雨のしずく
Sieh, hoch oben die Meise,　　ご覧、シジュウカラが空高く
schaukelt froh im Wind.　　楽しげに風に揺られている
　　（雨あがり空に遊ぶや四十雀）

(8)（19）
Mario Fitterer（マリオ　フィッテラー）

Kein Blatt stiehlt ihnen
die Sonne Buschwindröschen
zwischen den Stelen.

一枚の花弁(はなびら)も見逃しはしない
太陽はアネモネの花から
墓石の間に咲いた
（アネモネの早春を告ぐ墓の道）

(9)（25）
Sigrid Lichtenberger（ジークリート　リヒテンベルガー）

Hör auf zu schreiben
denn der Kirschbaum blüht
am Waldrand drüben

書くのを止めなさい
桜が咲いたから
向こうの森の入り口で
（森の辺に桜咲きけり手を休む）

（ハイデルベルクの春）

（バイエルン・ヴィース教会の春）

Sommer
（夏）

（10）（36）
Ingrid Gretenkort-Singert（イングリート・グレーテンコルトージンガート）

In Gruppen stehen	群れをなして咲いている
die Gänseblümchen im Gras	ヒナギクが、草の中で
und wispern leise	そっとささやいている
	（ヒナギクのそっとささやく草の中）

＊ドイツ俳句協会の創設に尽力した彼女（1927 年生れ）は 2015 年に亡くなった。
（協会季刊誌、“Sommergras”、2015 年、9 月号、Nr. 119）による。（竹田）

（11）（49）
Hildegard Schallenberg（ヒルデガルト・シャレンベルク）

Wie sie schwankt im Wind,	風の中で揺れている
die Rose — immer neu sucht	薔薇の花－絶えず探している
sie ihr Gleichgewicht.	平衡を
	（均衡の危なかしげな風の薔薇）

（12）（50）
Marianne Junghans（マリアンネ・ユングハンス）

Die Ackerwinde	ヒルガオが
umschließt mit Blüten	巻きついている
auch den Stacheldraht.	有刺鉄線にも
	（ヒルガオや有刺鉄線ものとせず）

（13）（51）
Susanne Köllersberger（ズザンネ・ケラースベルガー）

Blaue Iris auf	青いアイリスが
regenverhangenem Beet —	雨の残った花壇に—
schwer von Tropfenlast.	雨のしずくに頭を垂れて

（アイリスの青きしずくの頭（こうべ）垂る）

（14）（53）
Gerhald Albin Rödler（ゲルハルト・アルビン　レートラー）

Kleine Eidechsen,	小さな蜥蜴が
ganz starr zur Sonne gereckt.	お日さまに向かって体をのばしている。
Im Taxi schlafen.	タクシーの中では束の間の昼寝。
	（タクシーは昼寝蜥蜴（とかげ）は日向ぼこ）

（15）（59）
Rudolf Dressler（ルドルフ・ドレッスラー）

Mondspiegel am Teich	池の畔の月影
verschlossen die Seerose	睡蓮はひっそりと花冠を閉ざし
traut nicht den Geistern	夜の精霊たちに心を開かない
	（睡蓮は知らぬ月夜のファンタジー）

（16）（62）
Rosemarie Kubis（ローゼマリー・キュービス）

Strahlender Himmel,	光輝く空
Möwenflug und Möwenschrei,	カモメ達が啼きながら舞っている
jubelunden Freiheit.	自由の歓声をあげて
	（輝ける空に鷗の自由あり）

＊（参考）「空といふ自由鶴舞ひやまざるは」（稲畑汀子）（竹田）

（17）（65）
Hilda Koch（ヒルダ・コッホ）

In den Bäumen rauscht	木々はざわめき
das Meer seinen Sommersang —	海は夏を歌う—
offen die Fenster.	窓を開ける
	（開くる窓潮騒の音木々の風）

（北海・海水浴場）

（ハンブルク・アルスター湖）

Spätsommer — Altweibersommer — Herbst

（晩夏－小春日和－秋）

（18）（67）

Wolfgang D. Gugl（ヴォルフガング・D.　グーグル）

Spätsommermorgen :	晩夏の朝：
Im Flug noch stößt der Sperber	ハイタカが飛び
seinen Jagtruf aus.	狩りの声をあげている
	（秋近し朝ハイタカの狩りの声）

（19）（70）

Lili Keller（リリ・ケラー）

Feuerzauber zieht	夕日の魔術が

Letzte Sommergäste an,	夏の最後の客ムクドリを
enttäuscht die Starre.	留まらせる
	(ムクドリの渡りまどわす日の魔術)

(20)(71)
Waltraud de Martin(ヴァルトラウト・デ　マルティン)

Ruhelos gleiten	落ちつきなく滑空している
Schwalbenpaare am Himmel	燕のカップル
ohne Flügelschlag	羽も動かさずに
	(渡り時今や遅しと舞ふ燕)

(21)(73)
Reiner Bonack(ライナー・ボーナク)

Das Netz der Spinne	蜘蛛の囲が
zwischen Beeren und Blättren —	木の実や葉の間に —
Gespannte Stille.	張りつめられた静けさ
	(蜘蛛の囲に張りつめられし静けさよ)

＊(参考)「蜘蛛に生(あ)れ網をかけねばならぬかな」(高浜虚子)(竹田)

(22)(75)
Helena Wolters(ヘレナ・ヴォルタース)

Altweibersommer —	小春日和—
der Herbstwind bricht die Fäden,	秋風が蜘蛛の糸を切る
Tautropfen fallen . . .	露が落ちる
	(蜘蛛の囲の雫落ちけり秋の風)

(23)(76)
Rainer Maak(ライナー・マーク)

es zittert das Netz	巣が震えている
Regentropfen fallen schwer	雨の雫が重く滴る
die Spinne vergeht	蜘蛛は姿を隠す
	(蜘蛛の囲の濡れて残さる虚ろかな)

（24）（86）
Lilo Brentrup（リロ・ブレントルプ）

Durch das Nebelloch	霧のすきまから
huscht der Himmel in die See.	一瞬、湖に覗かせた青空
Im Grund — die Wolken.	湖の底には — 雲が
	（空と雲束の間映す霧の湖）

（25）（88）
Jan M. Greven（ヤン・M.　グレーフェン）

nebelfeuchtes Blatt	霧に濡れた葉が
ruht auf meinem Nacken aus	私のうなじに憩っている
heimwärts treibt mein Boot.	私のボートは帰路に就く
	（帰る舟我がうなじには濡れ落ち葉）

（26）（92）
Gert Wengel（ゲルト・ヴェンゲル）

Klarer Herbst, ins Laub	澄み渡った秋　葉っぱがひっかかっている
foglt die Tanne den Nadeln,	樅の木の針の枝に、
Lametta verweht.	去年のクリスマス飾りが風に揺れている
	（秋澄むや聖樹の飾り風に揺れ）

（27）（94）
Ilse von Heydwolff-Kullmann（イルゼ・フォン・ヘイトヴォルフークルマン）

Golden im Blatt steht	黄金色に葉を染めて
der Gingo trägt seinen Glanz	銀杏が光っている
in den frischen Tag.	さわやかなひと日
	（人もまた銀杏の金に染めらるる）

（28）（97）
Gerold Effert（ゲロルト・エファート）

Krüpplige Weide,	節くれだった柳の老木

sie schüttelt ihr schwazes Haar,　　黒髪をふりかざして
wütend im Herbstwind.　　秋風にあらがうように
　　（木枯らしに立ち向かう如古柳）

（29）（98）
Rainer Hesse（ライナー・ヘッセ）

Versöhnlich stimmen　　なごやかに融和する
die Spätherbstfarben am Fluß ―　　川辺の晩秋の色
nach all den Stürmen.　　数々の嵐が去った後に
　　（嵐去り川辺は秋の色に満つ）

（30）（100）
Elmar Hartstock（エルマー・ハルトシュトック）

Welkes Laub zittert　　枯れ葉が震えている
vor dem Schatten des Stammes　　幹に影を映して
dort in den Wellen　　向こうでは波の中で
　　（幹離れ落ち葉は波に消えゆけり）

（31）（102）
Heidelore Kluge（ハイデローデ・クルーゲ）

Warm ruhen Rosen.　　暖かく薔薇は守られている
Heimkehrt der Oleander　　夾竹桃も庭椅子も
und der Gartenstuhl.　　冬に備えて部屋の中に
　　（庭椅子も薔薇も小鉢も冬籠り）

（32）（104）
Franz Mörth（フランツ・メルト）

Herbstlichen Schatten　　秋の影が
fallen auf den müden Mann.　　疲れた男の上に落ちる
Er wehrt sich nicht mehr.　　彼はもはやそれに抗わない
　　（秋の日や男の影を顕（しる）くせり）

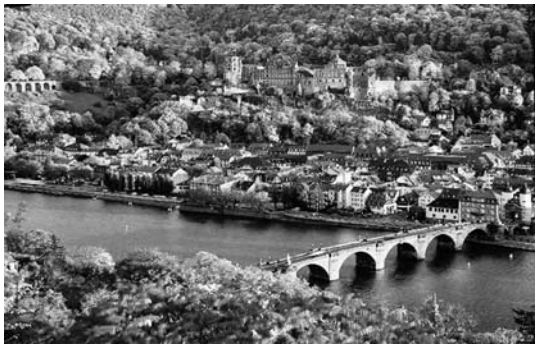
（33）（105）
Doris Götting（ドーリス・ゲティング）

Bäume laubentblößt—	葉を落ち尽した木々—
Welch Kräfte schützten euch	もはや何の束縛を
Knoten ins Geäst ?	枝は結ぶ必要があろう
	（葉を落とし木々は身軽となりにけり）

（34）（106）
Rüdiger Jung（リューディガー・ユング）

Entlaubt der Ahorn.	葉を落とした楓。
Die braunen Früchte haben	茶色の実が
den Abflug verpaßt.	飛翔を逸した。
	（自由への飛翔逃せし楓の実）

1961 年生まれ。神学を学び、1991 年から牧師。「オイレンヴィンケル・俳句賞」（1989 年）の最初の受賞者。この賞は、ドイツ俳句協会設立にあたって尽力した詩人、カール・ハインツ・クルツ（Carl Heinz Kurz, 1920 年～1993 年）の寄付によって、同協会の年次大会で設けられた。（竹田）



（ハイデルベルクの秋）

（ノイシュヴァーンシュタイン城の秋）

Winter

（冬）

（35）（112）

Annelie Meinhardt-Miesen（アンネリー・マインハルト－ミーゼン）

Letztes Ahornblatt :	最後の楓の葉―
Durch ein Loch im Gewebe	透けた葉脈から
schaut weiß der Winter…	白く冬が覗いている
	（楓葉を透けて見ゆるや冬の顔）

（36）（114）

Else Keren（エルゼ・ケーレン）

Winde wehn kalt	風が冷たく吹く
nicht immer―Sommerstrahl wärmt	稀にさす日の光が暖めてくれる
Herz Hand Falter Dich	心、手、蝶、人間を
	（寒風に日差しは優し蝶と人）

1924 年、イスラエル生まれ。パリに学び、パウル・ツェラーンと親交があった。

（37）（116）

Verona Bratesch（ヴェローナ・ブラーテシュ）

Eisiger Wind keucht	氷のように冷たい風がうなる
in den verschneiten Nestern :	雪に覆われた巣 :

Rotkehlchen frieren.	コマドリが凍えている （コマドリの巣は風の中雪の中）

（38）（118）
Marcel Smets（マルセル・スメーツ）

Ein Winterabend Schafe stehen zusammen— ruhig im Dunkel	冬の夕べ 羊たちは群れてたたづんでいる— 闇の中で静かに （冬の夜や羊静かに群れてをり）

（39）（119）
Leonie Patt（レオニー・パット）

Verlassne Alp. Schnee liegt, wo Vieh mit Glocken ging — Nun schreien Dohlen.	誰もいなくなった山の牧場。雪が 残っている。カウベルを付けた牛が去って行った— クマガラスの啼き声だけが聞こえてくる。 （カウベルは去りクマガラス啼いてをり）

（40）（121）
Ute Sieber-Limbrecht（ウーテ・ジーバーーリムブレヒト）

Bonsai des Lebens ohne Blätter im Winter Größe im Kleinen	人生の盆栽 葉を落とした冬に 小の中の大 （盆栽に人の命のありにけり）

＊「盆栽」はヨーロッパでは愛好家が多い。老人の趣味ではない。「ドイツ盆栽クラブ」もあって、会員数は3000人といわれる。「ドイツで人気の楓は、春の芽吹き、夏の観葉、秋の色づき、冬の落葉という、四季をたえず意識させてくれるもので、それは人間を自然のなかへ没入させることができる。ここでは人間が優位ではなく、自然と同化、あるいは一体化した時空をつくる」。（浜本隆志、『現代ドイツを知るための62章』、P. 340）（竹田）

（41）（124）
Volker Friebel（フォルカー・フリーベル）

Weggabelung im Schnee :	新雪の中の道の分岐点：
Beiderseits gleich viel Spuren,	どちらの方角にも向かっている多くの足跡
und tiefe Stille.	深い静けさ
	（新雪に足跡残る分岐点）

＊（参考）次の一句は日本学の泰斗、ホルスト・ハミッチュ（1909～1991）の作品。

Verschneit ist die Spur.	人の世の
War's Abschied, war's Rückkehr—	生死（しょうじ）分かたぬ
Wer kann es sagen?	雪の跡
（Horst Hammitzsch）	（葉道、ホルスト・ハミッチュ）（竹田）

（42）（126）
Alfred Gruber（アルフレート・グルーバー）

Es schneit auf Birke	白樺に雪が降る
und Lebensbaum, es schneit auf	柏の木にも
Kirche, Haus und Grab.	教会にも家にも墓の上にも
	（雪降りや家も御堂も茫々と）

＊（参考）
太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。（三好達治）（竹田）

（43）（128）
Emmerich Lang（エマーリヒ・ラング）

Weiß ist der Garten.	白一色の庭
Mit der Kinderschaukel spielt	ブランコと遊んでいるのは
der eisige Wind.	氷のように冷たい風
	（寒風に鞦韆（しゅうせん）揺れる銀世界）

（44）（130）
Ludwig Schumann（ルートヴィヒ・シューマン）

Wenn der Schnee harsch wird	雪が凍結すると

laufen Rehe behutsam :	鹿たちの歩みは慎重になる：
Die Fesseln schmerzen.	ひずめが傷つかないように
	（凍結にひずめをかばい歩む鹿）

＊ブアーシャーパーの解釈に依れば、この句は旧東ドイツ当時の人々の生活を暗示しているという。

（45）（132）
Lia Frank（リア・フランク）

Den kalten Regen	氷雨を
genießen die Saatkrähen —	ミヤマガラスは楽しんでいる—
weich ist der Acker	農地は柔らかい
	（氷雨にもめげぬ畑のカラス哉）

（46）（134）
Fridrich Rohde（フリーフドリヒ・ローデ）

Streit in der Sippe.	仲間喧嘩
Im Baum die Krähen werfen	木の中でカラス達が非難し合っている
Proteste sich zu.	互いに文句を言いながら
	（唖唖（あ あ）の声喧嘩分れのカラス達）

（47）（136）
Ruth Tetzner-Hallard（ルート・テツナー―ハラルト）

Krähen auf dem Feld	畑の上で舞うカラス達
wo Tier verendet im Schnee	雪の中で獣が死んでいる
Schwarz der Baum — nicht tot !	黒々とたたずむ木 — 死んではいない！
	（生ける木と死せる獣に舞ふカラス）

（48）（138）
E. G. M. P. Oostvogel（E. G. M. P. オーストフォーゲル）

Eisige Stille	氷のような静けさ
wenn Birkenbäume brechen,	白樺の細い枝が折れる、
Glas um die Äste.	枝を包んだガラス
	（白樺の枝にガラスの静寂（しじま）哉）

（49）（140）
Adolf Kommert（アドルフ・コマート）

Goldne Zaubernuß,
blühest scheu zur Winterzeit !
Erster Frühlingsgruß.

金色のマンサクが
おずおずと咲いている、冬に！
最初の春のあいさつ
（マンサクの春の訪れ告げてをり）

（50）（142）
Maria Lanfer（マリーア・ラフナー）

Für einen Grashalm
hat der Frost auf der Straße
den Asphalt gesprengt.

一本の草の茎のために
道路の上の霜が
アスファルトに亀裂をつくる
（霜が割るアスファルトより草萌ゆる）

（51）（144）
Ilse Hensel（イルゼ・ヘンゼル）

karottenrotgelb
die flechten im weißen schnee —
auf gestürztem stamm.

ジャガイモ色に光る
白い雪の中に地衣類が—
倒れた木の幹に
（倒木に苔の抽ける斑雪（はだれ）哉）

（バイエルン・ラムザウの冬）

（谷中・長橋　編『ドイツ・クリスマスの旅』、東京書籍、1995年、より）
（サンタクロースとクリスマス・ツリー）

お　わ　り　に

以上、今回は51句の訳に終わった。短いだけに隠された意味を読み解くのはむずかしかった。作者がドイツ語圏のみではないので、人名の読み方が不明も点が多かった。また、動植物の名前とその具体的な姿も分からないものもあった。

訳しながら何度も頭をよぎったことは、多くの作者、それもドイツで出会ったことのある人々の多くが亡くなっているのではないか、ということであった。本選集に収められた作品は1990年までのことだから。

西欧ではじめて芭蕉の作品を論じたバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chemberlain, 1850-1935）は『日本事物誌』（Japanese Things, 1905）を古き日本の「墓碑銘」（epitaph）と呼んでいる。存命の方々には失礼なことではあるが、訳者には絶えず、このことばが脳裏に浮かんだ。ブアーシャーパーの原稿が墓碑銘ではなく、「記念碑」（monument）と名付けるにふさわしいことには変わりはない。